

平成二十六年十月

越中 哲也

## 長崎くんち今年のみどころ(其の二十七)

一、はじめに

長崎の開港は、一五七〇年(元亀元)初めてポルトガル船の入港に始まると言う。当時の長崎の街はキリシタン大名大村純忠の支配下にあり長崎地方の領主長崎甚左衛門も靈名をベルナルドと言い、当然その支配地の全ての寺社は廃されていた。

天正十五年(一五八七)秀吉の伴天連追放令、慶長元年(一五九六)十二月二十六聖人の殉教以後は長崎の街にも寺・社の進出がみられる。神社は慶長十二年(一六〇七)唐津より進出してきた山伏威福院高順が東中町に天満宮を創立したのが最初で、元和九年(一六三三)には佐賀より山伏青木賢清が長崎西山の地に諏訪社を創立、寛永十一年(一六三四)長崎奉行所は諏訪社を長崎鎮守の鎮西大社と定め、其の祭礼日を九月九日・前夜式を同七日(旧曆)と定めた。昭和以来、多少の変遷はあったが現在まで三八〇年その伝統は伝えられ、昭和五四年には国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

二、今年の踊町

○興善町 この町名は長崎初期の町名であり博多の豪商末次興善が開いた街で、有名な長崎代官末次平蔵は彼の長子である。平蔵は興善町の隣に新町を開いている。原爆の日、両町は共に全てを焼失し戦前の傘鉾も失ってしまった。戦後両町は町内の浅田・村山氏の御協力もあって、傘鉾には秋の神楽奉納の意を込めて紅葉の許に烏帽子・神楽鈴を八足の上に配している。踊は町内子供連



八幡町傘鉾(昭和11年)

中も加え藤岡峰織貴師匠指導で新趣向の「石橋」の獅子踊が奉納される。○八幡町 正保二年(一六四五)天台宗の山伏大覚院存性が京都男山八幡宮の御分神を現在地に奉祀した事より町名は始り、傘鉾も其の社名の「弓矢八幡」に因んで弓と矢に八幡様の遣

物の「鳩」を配し、「其の傘鉾の高さは長崎一です。」と言われる。更に奉納踊も八幡大菩薩が町内の山伏衆に守られ「祝い八幡祝い船」に乗られて長崎入港の様を写したもので、長崎に着かれた八幡様は遣いの白鳩を京都に発たれ、山伏の舞が始り、「祝い船」の引き廻しがある。

○万才町 元亀二年(一五七二)長崎に最初のポルトガル船が入港した時、すでに万才町の周辺には島原町他六町の街が開けていた。万才町の旧町名は「島原町」と言っていたが、「明治五年六月十四日明治天皇・島原町高木邸に行幸あり、長崎の人々万才の声をあぐ、これ我が国「萬財」の始めなり：ここに、萬才町の町名は「万才」と記してある。以来、同町の宮日の傘鉾のダシ・奉納踊の全て「萬才」に因んでつくられている。

○麴屋町 昔より麴屋町は「長崎一の水量ゆたかにして、財ある街である」と言う。其の故に同町の傘鉾の飾は、紅白の梅花が咲き、其の梅の古木には、当時第一の来船清人の書家・除雨亭が麴蓋に町名を揮毫し其の額が掲げられている。同町の奉納踊は銀屋町の「大名お鷹狩りの通り物」に対して「大名お茶献上行列」であったが、戦後は水の豊かな中島川に因んで川船が登場。子供船頭さんの網打ちと、勇壮な船の引き廻しは有名である。

○銀屋町 昔は同町で作られていた唐様臘型鑄物銀細工は有名で、多くの名工が居住していた。中でも「鯨の置物」は有名であったので之を傘鉾の飾とした。鯨は荒浪を押し分け天に登ったので傘鉾の幕には男浪女浪を織り出し其れに金銀細工の水玉をあしらっている。そして奉納踊も其の傘鉾に合わせて「豪快な鯨太鼓」が奉納されている。鯨太鼓は樺島町奉納の「太鼓山コッゴデショ」と双んで長崎名物東西太鼓山の一つとして全国的にも有名であり、今年の「長崎くんち評判物」の一つである。

○五島町 昔この町は海岸添いを浦五島町、崖下を本五島と言ったが現在は五島町に統一されている。傘鉾は同町の旧家肥塚家に伝えられてきた「秋草に二つの風雅な虫籠」を配した長崎では有名な傘鉾である。奉納踊は、昔、

浦五島町一帯は海岸であり、毎年春に入港してきた唐船は此の町の浜辺に順次つなぎ止められていた事より唐船伝来の龍踊が奉納される。長崎の「蛇踊」は其の昔、唐人屋敷内土神堂に災禍の難を避けるため唐船の人達が奉納した事に始まっている。

○西浜町 長崎開港当時この地は浜辺であったが、寛文十二年(一六七二)長崎奉行所は浜町を東西に分けている。傘鉾は文化元年(一八〇四)作。町名に因んで貝合せを主題にした有名な傘鉾で、「垂り(幕)も有名な長崎刺繍姑蘇十八景図。奉納踊も明治十九年製三ツ車式龍船で踊場では上部の屋根が開いて舞台となる。之が見せ場であると言う。尚、傘鉾の輪に我が国最初の英字の町名が記してあり之も長崎名物の一つとして有名である。

※参考資料 「長崎くんち」呂紅社刊(山下寛一編集)

## 新長崎市史の刊行について

伊達木 由美子

「長崎市史」の編さんは大正八年に始まり、大正十二年第一巻「地誌編佛部」が発行され、昭和十三年「通行貿易部」の発刊に至るまで二十年の歳月を要しています。この市史の発刊は最初六年間の予定でしたが、余りにも長い年月がかかったので政治・美術・工芸・人物・年表・通史の各編は未刊のまま事業は終了しました。

その後、「長崎市政五十年史」「同六十五年史」と「長崎市史年表」・「市政百年長崎年表」は発刊されましたが、古代から現代までの通史は発刊されませんでした。

其の間、長崎の古代から現在までを網羅した「新しい長崎の歴史書」を作りたいとの考えが、有識者や市職員の間にも根強く存在していました。

その中の一人が田上現長崎市長で、当時、田上市長は市職員で「市政百年長崎年表」の編纂時には「新市史発刊検討委員会」の一人として議論を重ねていましたが、当時は諸般の事情で「新市史」編纂の事について立ち上げるに至りませんでした。



長崎市史(全四巻)

その後、田上市長の時代になり、長崎市制施行百二十四年に当る平成二十二年を契機として新しい市史編纂の事業を開始することになりました。其の編纂の期間は六年、執筆依頼者は長年にわたり調査研究されてこられた方々にご協力頂き、又、新たな資料も加えて全四巻、各巻ともにB5判オールカラー。わかりやすく読み易い内容になっています。

各巻の主な内容をご紹介します。

第一巻【自然編、先史・古代編、中世編】

「自然編」長崎市の自然を取り上げ、そこには気象・地質等の専門的な事も加え、本編では「長崎で比較的地震が少ない理由」・「水産県長崎の魚のランキング」・「明治七年長崎に於けるオランダ・アメリカの金星観測」・「シーボルトと子年の台風」・「長崎の植物と動物」先史・古代編「発掘調査研究の成果を中心に縄文・弥生時代の長崎人の生活様式等、物言わぬ遺跡の音なき声を聞く事にしたものです。」「中世編」長崎の中世文書は僅かですが、中世遺跡の発掘調査報告、新しいイェズス会文書等、海外資料の発見等により新しい中世長崎文化史が描かれています。

第二巻【近世編】

近世の長崎は西洋、東洋に向って開かれた唯一の港であり、当時の我が国を代表する諸外国の近代文化を輸入する事のできた処でした。そして又、諸外国に開かれた唯一の対外貿易港でありその遺跡は多く、其の文化は今も長崎の町に残っています。

第三巻【近代編】

安政の開港。それは長崎にも大きな足跡を残しています。居留地の文化、キリスト教の布教、食文化の変化、港湾改良、上海航路、観光博覧会等々、そして日清・日露の戦争から要塞地として激動の長崎を迎える。戦争に翻弄されながらも逞しく生き抜いてきた長崎の人達の足音が聞こえてきます。

第四巻【現代編】

原爆投下後、焼け野が原から始まった戦後の長崎。やがて平和都市長崎の建設を目指して立ち上がりました。次は高度成長期を迎えました。合併により市域は拡大しました。然し長崎大水害で甚大な被害を被りましたが、その教訓を生かして新しい街づくりが現在は大いに展開されています。戦後の長崎のあらゆる面で躍動感あふれる姿をよみがえらせたいと願っています。(長崎市市史編さん室長)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一―一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

